

第1回

平成23年度
学習院中等科入学試験

国語

時間 8:40 ~ 9:30

国
A

〔注意〕

1. 試験中は受験票を机の左上におきなさい。
2. 机の上には筆記用具（えんぴつ、シャープペンシル、消しゴム）と受験票以外は出してはいけません。
3. 解答はすべて解答用紙に書きなさい。
4. 始めの合図があるまでは問題を開いてはいけません。
5. 問題の内容についての質問は受け付けません。
6. 試験の終了はチャイムの鳴り始めです。
7. 用がある人は静かに手をあげなさい。
8. ページがぬけていたり、印刷が読みにくかったりした場合は先生に申し出なさい。
9. 試験が始まったら、問題のページ数をたしかめなさい。問題は1ページから15ページまでです。
10. 字数が決まっている問いについては、「、」や「。」も一字と数えます。

— 1 —
次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

七月中旬(ちゅうじゅん)、桜ヶ丘(さくらがおか)中サッカー部の*総体の初戦は、ホームグラウンドで行なわれた。午前九時キックオフと聞いていたので、試合開始の二十分前に着くように、妻と一緒に(いっしょ)に自転車で出かけた。グラウンドに到着(とうちゃく)すると、サッカー部の出もどり息子(むすこ)の親ゆえに、応援(おうえん)に集まったチームメイトの保護者の一団からは、少し離(はな)れた場所(ばしょ)でかん戦することにした。

「桜ヶ丘中の*スタメンは、全員三年生らしい」

妻はそう言っていたが、試合前に組まれた先発メンバーの円陣(えんじん)のなかに、息子の姿はなかった。ユニフォームとは色ちがいのオレンジ色の*ビブスを着て、ベンチにすわっていた。この大会で監督(かんとく)にあたえられた陽平の背番号は15だった。

まだ梅雨(つゆ)明け前だったが、青い空はすでに夏の雲を宿し、ゴール裏の木立では蟬(せみ)が①ハゲしく鳴いていた。朝のテレビのニュースでは、今日明日にも、関東地方は梅雨明け②センゲンが出される見込(こ)みだとつたえていた。午前中から気温は高くなりそうだった。

私は久しぶりにグラウンドでカメラを手に使っていた。古い一眼レフには、陽平が小学校の頃(ころ)に中古で購入(こうにゆう)した500ミリの望遠レンズが③ソウチャクされている。試合に息子が出ないのであれば、文字通り無用の長物(ながぶつ)でしかなかった。

グラウンドの上空をヘリコプターが通過した直後に、黒服の主審(しゅしん)のホイッスルが鳴り、前半の三十分が始まった。その笛に合(あ)わせて、デジタル腕(うで)時計のストップウォッチのスタートボタンを私は押した。

対戦相手の黒川中は、聞きしに勝る強豪(きょうごう)だった。去年の*雪辱(せつじょく)を誓(ちか)って④ノゾんだ桜ヶ丘中だったが、前半の五分過ぎにコーナーキックからあっさり一点を先制されると、前半終了(しゅうりょう)⑤マギワにも、ディフェンダーの連係ミスから追加点を決められる⑥キビしい展開となった。選手同士で声をかけ合っているものの、なす術(すべ)のない時間帯が続いた。

どうしても親としては、息子の出番を期待してしまう。いつの間にか、味方左サイドのミッドフィルダーの選手と陽平を比べていたりする。その選手は陽平が背負っていた背番号7を付けていた。なぜ監督は陽平を出さないのか、と「A」気持ちをおさえながら前半終了

の笛を聞いた。木陰（こかげ）に入っていたが、それでも暑い。でも、もつと暑くても構わないから、近くで試合をみたいくらいだ。

ハーフタイム、陽平はチームメイトにぬれタオルを渡す役を買って出ている。先発した選手の肩（かた）をたたくその顔には、笑（え）みがあった。一度はチームをはなれ、再びまいもどった選手。そんな陽平にチャンスはあたえられないのだろうか。陽平が*アップをする気配はなかった。後半も引き続きベンチのようだ。

「選手交代は、何人までかな？」

妻がとなりでつぶやいた。

「公式大会だから、いつもと同じだろ」

「じゃあ、三人ってことね」

私は両腕を組んでベンチを見つめた。チームに三年生は十五人。その三年生は全員ベンチに入っていた。交代枠（わく）をすべて三年生に使ったとしても、少なくとも三年生のなかで、ひとりは試合に出られない計算になる。このまま試合に負けてしまえば、陽平の中学サッカーは今度こそ終わりをむかえ、スパイクをぬぐことになる。

再びベンチ前で円陣が組まれ、後半戦が始まった。太陽は中天にかけのぼり、日差しがますます強くなった。この炎天下（えんてんか）でボールを追うことがどういう行為（こうい）なのか、サッカーを始めた今の自分には、少しはわかるような気がした。だから軽々しくプレーを批判（ひはん）する気にはなれなかった。

後半開始から、桜ヶ丘中は、まずフォワードのひとりを交代した。

「二年生の林君。次期キャプテン⑦コウホらしい」

「そうなんだ」

答えたものの、正直どうでもよかった。

これで選手交代のカードは残り二枚。いきなり二年生をピッチに送り込んだということは、三年生も二年生も分けへだてなく試合に出す、というメッセージとも受け取れる。戦況（せんききょう）を見つめながら、陽平の出るチャンスについて考えた。陽平は二年生のときでさえ、三年生に交じってこの大会に出場していた。実力でいえばまちがいにレギュラーこうほといえた。チームに陽平の力は必要はずだ。

試合に出られない理由は、チームを一度離れたからだろうか。でも、それは学校の周りを走ることとつながったのではなかったか。世の中には理不尽（りふじん）なことはいくらでも転がっている。そんなことは知っている。でも、なにもそれを中学生の陽平が、今、学ぶ必要があるのだろうか。あるいはグラウンドに一步入れば、そこは実力の世界ではないのか、などと勝手な理屈（りくつ）をいくつも持ちだしては、ため息をもらした。それこそチームのだれかが怪我（けが）でもすれば息子が出られる、そんな*不埒（ふち）な考えさえいだしてしまう自分がいた。

後半十分、監督が動いた。桜ヶ丘中は選手交代の二枚目のカードを切った。が、陽平ではなかった。三年間まじめに部活に参加した山本君だと、妻が解説してくれた。そういえば小学生時代もよくベンチを温めていた子だった。随分（ずいぶん）と背が高くなっていた。でも、こは山本君じゃなくて、陽平だろう、と声に出したくなった。

「まだ、ひとり交代できるんでしょ？」

妻が声を【 B 1】。

「できるよ。でも、交代枠の最後の一枚は、不測の事態に備えて取っておくもんだよ」

「不測の事態って？」

「たとえば、ゴールキーパーが怪我をするとか」

「（1）そんなこと言ったって……」

妻は身をかたくして、ベンチの陽平を見つめた。

腕時計を見る。残り時間は、刻一刻と短くなっていく。

後半二十分、ピンチの連続をしのいだ桜ヶ丘中についてチャンスが訪れた。ペナルティーエリアでパスを受けた二年生の林君がたおされた。相手の不注意なファウルで、桜ヶ丘中に*PKがあたえられた。

「決めてくれ、決めてくれ」と私は念じた。そのPKをキャプテンの五十嵐（いがらし）君が、冷静にゴール右すみに流し込んだ。ホームグラウンドが歓声（かんせい）にわいた。これで試合はわからなくなった。あと一点、もう一点入れば、同点となり、試合はふりだしにもどる。ベンチにすわっていた三人の選手がアップを開始した。そのなかに陽平の姿もあった。あきらめかけていた試合に、突然（とつぜん）希望

の光が差した。声援も大きくなった。そうであれば、一刻も早く最後の切り札を切るべきではないのか。時計を見る。残り八分しかなかった。私の瞳（ひとみ）には、*ピッチのなかで戦う少年たちの姿があった。強烈（きょうれつ）な日差しの下で、彼らは懸命（けんめい）にボールを追っていた。走り、蹴（け）り、跳（と）び、さけび……。相手のゴールに、より多くのボールを運び入れたほうが勝ち、という単純なゲームに没頭（ぼつとう）していた。タッチラインの向こうから彼らの息づかいが聞こえた。

（2）——ああ、いいな、

と思った。こんなふうに、自分も中学生時代を過ごしたかった。あのころにしかできなかったことを、もっとしておけばよかった。後悔（こうかい）とまではいわないが、そんなふうにも感じた。がんばれよ、がんばれよ、と声には出さずに応援していた。

残り、七分、

……六分、

そして、……五分。

腕時計を小刻みにみたが、期待はしなかった。ただ彼らの戦いに見入っていた。陽平の仲間を応援しよう、そう、気持ちを切りかえた。不意に脇腹（わきばら）をひじで小づかれた。

「痛いっ」

と言つてとなりを見ると、妻が顎（あご）をしゃくった。

ベンチ前に視線を移すと、ピスをぬいだ陽平が、ユニフォームをパンツのなかに入しながら監督の指示を受けていた。出るのだろうか。ボールがタッチラインを割ると、副審がフラッグを両手で水平にあげる選手交代の合図を出した。陽平がタッチラインに立った。

「陽平君、たのむよ！」

チームメイトの保護者から声がかかった。

私はその女性の前へ行き、握手（あくしゅ）を求めたいくらいだった。

腕時計を見ると、残りは三分。背番号7の左サイドハーフの選手との交代だった。退場する選手と片手を合わせると、陽平は反対サイドへと急いだ。

「がんばって、陽平」

妻が、私にだけ聞こえる声でさげんだ。

主審のホイッスルでスローインから試合が再開された。だが、なかなか味方ボールにならない。

再び腕時計を見る。液晶（えきしよ）画面に00:28の文字がうかぶ。残り時間は二分。ロスタイムは、どのくらいあるのだろうか……。

青のユニフォーム、桜ヶ丘中がボールをうばう。両チームとも足が止まってきていた。左腕にオレンジ色のキャプテンマークを巻いた五十嵐君が、左サイドにボールを展開した。

（3）その瞬間、私はピッチに立っていた。まるでカメラが切りかわるようにピッチの風景が脳裏（のうり）に映しだされた。かわいたグラウンドの照り返す日差しに熱にむせかえるような緊張感（きんちようかん）が走った。

左足でボールを受けると、すばやく前に仕掛（しかけ）けた。その最初の一步目で、敵のミッドフィルダーを置き去りにすると、サイドを駆け上がった。タッチライン沿いに、細く道が続いている。首をふると、息をふき返したチームメイトがゴールに向かって走り込んでくる。その期待を裏切ることなく、切れのよいサイドステップで、さらにディフェンダーをぬき去る。左サイドを深くえぐったその場所から、左足

で*クロスを上げた。

ゴール前、敵の黒と黄色の縦じまのタイガーカラーのユニフォームと、味方の青のユニフォームが交錯（こうさく）する。海面を割る魚たちのように、陽平のボールに合わせて、選手たちが跳んだ。

「うっ！」

思わず、たるんだ腹に力がこもる。

だが、ボールは無情にも敵にはね返された。

「左を使い！」

キャプテンの五十嵐君がさげんだ。

——そうだ、そうしろ！

心のなかで私もさげんだ。交代したばかりの陽平の動きだけが、ほかの選手とは異質に見えた。（4）可能性を感じた。

ロスタイム、再びボールが陽平に渡る。

間合いを取った陽平は、身体をたおすようにして相手に向かっていった。引かかるようなステップで相手を引き出し、強引にぬきにかか
る。敵はすでにゴール前を固めていた。

主審が、腕時計を確認するのが見えた。

「早く早く、時間がない！」

両手のこぶしに力を込めた妻の音が、悲鳴になる。

深く軸足（じくあし）をふみこむと、陽平の左足から放たれたクロスが、ゴール前をすく巻いていく。ゴールキーパーが飛び出したが、
ボールにさわれない。だれかの身体にボールが当たり、はずむ。⑧コンセンのなか、五十嵐君が右足をふりぬくのが見えた。

砂ぼこりがまった。

グラウンドが、一瞬（いっしゅん）静まり返る。

するどいシュートは決まったかに見えた。が、ゴールポストの左におしくも外れた。それが、最後のチャンスとなった。

主審が両手を挙げて、ホイッスルを三度長く鳴らした。試合終了の笛。

シュートを外した五十嵐君の顔がゆっくりとゆがみ、両手で顔をつかんだ。歓喜する黒と黄色の縦じまのユニフォームのかたわらで、青色
の選手たちが次々にグラウンドにくずれ落ちた。勝ったチームの親たちの歓声が、反対サイドで上がった。

——終わったのだ。

グラウンドにたおれ込んだチームメイトの向こう、左サイドにぽつんと陽平の姿が見えた。腰（こし）に両手を当てて、その場に立ってい
た。陽平は、泣いてはいなかった。（5）たぶん、泣くわけにはいかなかったのだ。うなだれることなく、唇（くちびる）をすぼめるように
して、じつと動かなかった。その姿に、息子の成長を感じた。【 C 】そう言いたげだった。

チームは初戦で敗れたけれど、最後まであきらめない姿勢には、月みな言葉だけれど胸を打たれた。もう少し時間があれば、そんなふう
にも思えた。でも、陽平はあたえられた時間を精一杯（せいいっぱい）戦ってくれた。短い時間だったけれど、かがやいていた。

左サイドをかけぬけ、ゴール前にクロスを上げた陽平。あのとき、私にも見えたような気がした。サイドを突破してクロスを上げる陽平の

見ている風景が。このあいだの試合でよく似た場面があったせいかもしれない。でも、その左サイドからの景色は、私自身がピッチに立たな
ければ、きつとながめることはなかったはずだ。

息子がなぜサッカー部をやめたのか知りたい、と言った私を、*真田はサッカーにさそってくれた。えぐるような腹の痛み、喉（のど）の
かわき、とてつもなく重く感じる自分という身体。最初はなんで四十過ぎになって、グラウンドでこんなにつらい思いをしなくちゃならない
のか、と正直思った。でも、この年になって、息子と同じ場所に立てたことがうれしかった。それが真田の言っていた陽平と同じポジション
に立つ、という意味だったような気がした。同じグラウンドの風景をピッチに立ってながめるといことが……。

結局、グラウンドでは、（6）手にしたカメラのシャッターを一度も切らずじまだった。帰り道、児童公園の紫陽花（あじさい）がさい
ていた。今日の空を水でといたような青い花の玉をたくさんつけていた。なんだかもったいなかったもので、自転車をとめて、紫陽花の前に妻
を立たせた。望遠レンズなので、少し離れた場所からシャッターを切った。妻をひとり撮（と）るなんて、何年ぶりのことだろう。妻がた
めらいを見せたのも無理はない。

「お父さんも撮（と）ろうか？」と言われたが、遠慮（えんりょ）しておいた。

「いいクロスだったな」

家に帰って来た陽平に、それだけ言った。

陽平はだまっただまま私を見た。その瞳は、「【 D 】」と言っているような気がした。

はらだみずきの文章による

*総体 夏に行われる大会。

*スタメン 最初に出場する選手。

*ビブス 試合に出場している選手と区別をつけるためにユニホームの上に着るベスト状のもの。

*雪辱 前に負けた相手に勝って、負けた恥（はじ）を消し去ること。

*アップ ウォーミングアップ（準備運動）の略。

*不埒 けしからぬこと。

*PK ペナルティーキックの略。相手チームの反則により与えられるキック。

*ピッチ サッカーを行う場所。

*クロス サイドからゴール前の地域へ出すパスのこと。

*真田 陽平が小学生の時に所属していたチームのコーチ。「私(陽平の父親)」が所属するチームの監督もしている。

問一 ぼう線①から⑧のカタカナの部分の漢字に直しなさい。

問二 【 A 】に最もよく当てはまる言葉を、次の中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア とまどう イ 不思議な ウ いらだつ エ 悲しむ

問三 【 B 】に最もよく当てはまる言葉を、次の中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 落とした イ あらげた ウ 出した エ はずませた

問四 波線(1) 「そんなこと言ってたって……」の下につづく言葉を考えて、二十字以内で答えなさい。

問五 波線(2) 「——ああ、いいな」とは、何をこう思ったのですか。その内容として最も適当なものを次の中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア スポーツで中学生の時に体をきたえること。

イ 今しかできないことを懸命にしていること。

ウ 強烈な日差しの下でも体が自由に動くこと。

エ 単純なゲームに没頭できる純粋(じゅんすい)な気持ち。

問六 波線(3) 「その瞬間、私はピッチに立っていた」とは、どういうことの例えですか。四十字以上五十字以内で説明しなさい。

問七 波線(4) の「可能性」とは、何について感じたのですか。「の可能性」に続く形で、漢字二字で答えなさい。

問八 波線(5) 「たぶん、泣くわけにはいかなかったのだ」と思った理由を三十字以上四十字以内で説明しなさい。

問九 【 C 】に最もよく当てはまる言葉を、次の中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 自分のせいじゃない

イ 強くてかなわなかった

ウ おれは、まだできる

エ 高校ではがんばる

問十 波線(6) で、シャッターを切らなかった理由として最も適当なものを次の中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 出もどり息子の親で、気がひけたから。

イ 陽平が出場している時間が短かったから。

ウ 撮ることをすっかり忘れてしまったから。

エ 試合を見るのに夢中になっていたから。

問十一 【 D 】に最もよく当てはまる言葉を、次の中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア あれは点を決めてほしかったな。

イ それが、父さんにわかったかい？

ウ いい加減なこと言わないでくれ。

エ どうして今さらそんなことを言うの？

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ぼくは猫（ねこ）が好きで、ずっと飼っている。

猫たちはどのように生きているか、なぜそういう生き方か。見ていて飽（あ）きない。へ 1 へ
 そういう小さな日常の感覚と、学問として環境（かんきょう）や生態といった大きな自然のシステムを研究することは、一見関係ないように見えて、実は同じ地平でつながっている。

（A）最近では、いつてみれば猫などの動物を通じて環境を知ろうというような研究や教育のアプローチが盛（さか）んだ。それでいいのだろうか。大事なことはまず、猫はどんな動物か、犬とどう違（ちが）うかを具体的に知ることではないだろうか。今の生態学には環境という考えが入りすぎているのではないかと思っている。

猫の生態を知るために、猫そのものを調べるのではなく、猫がどういう環境を持っているか調べましようというのは、（1）話の順番が違（ちが）うのではないか。

環境にしろ生態にしろ、相手にしているのは漠然（ばくぜん）とした正体のわからないものだ。学問とは本来、そういう大きな疑問の、まづどこから手をつければいいかを考えるもので、猫は、少しでも具体的にわかるところから疑問を解いてみようとするひとつの事例にすぎない。

（2）部分がわかったからといって全体がわかったことにはならないということに、研究者はもっと注意するほうがいいのではないだろうか。学問の本質と目の前のテーマとの関係を、はつきり知っておくことが大切だと思う。

自然現象は幅（はば）広い。

人間が調べたひとつやふたつの①ヨウソでできあがっているのではないということをやちゃんと認識（にんしき）することがいちばんじゅうようで、おおげさにいえば、それは我々が自然とはどういうものかを基本的にどのように認識するかということに関係してくるだろう。人間には自然を破壊（はかい）することはできてもコントロールすることはできない。ぼくはそう思っている。

ある時代から人間は、科学の力で自然を制御（せいぎよ）できると思いはじめ、今もそう信じているが、それは根本的な間違いだ。

自然には人間がわかっている以上のたくさんの変数があり、自然をいじってダメにすることはできるけれども操（あやつ）ることはできない。ちやうど、何も知らないしろとが、電車を止めることはできても、電車全体を運行させることはできないように。

自然を動かしているシステムはもっと②フクザツだ。

だからこそ環境や生態といった自然を対象とする研究は、具体例から進めていくのがいいと考える。人間にはそれしかできないはずなのだ。もちろん、げんしりよくや③イデンシの操作のように、人間は自然現象の一部分を止めたり進めたりはできるようになったかもしれない。ほかの動物にくらべれば、少しできるようになったのだろう。

（B）全部は無理だ。それでいばってしまったらおしまいだ。

そのいみで、（2）地球温暖化もそう簡単に止められないだろうと思う。化石燃料が大気のバランスを壊（こわ）す一因になったとは思わが、きこう変動そのものは、地球に人類が生まれる前から起こっているふくざつな自然現象だ。

科学のおかげで人間はいろいろなことをできるようになったが、それで自然全体をコントロールできると思うのは非常に危険だという気がする。

いきものの生態を④カンサツするために、*アクアリウムや飼育箱のような限られた実験空間がひつようなことがある。ぼくはもともとそうやっていきものやその環境をコントロールすること自体にあまり⑤キョウミがない。しかしそういうことが好きな人もいて、困ったことに、そのほうが科学的だと思われる。

科学とはすなわちコントロールすること、そして人間は科学ができ、ほかの動物はできない。へ 3 へ
 限られた箱の世界をのぞき込（こ）むうちに、（3）そういう認識を育ててしまいうすいことには気をつけなくてはならないだろう。

ただぼく自身、チョウのさなぎの色が変わる原因を調べたり、ハチの生育条件を探（さぐ）ったりするのに、飼育箱はおおいに利用した。自然をコントロールしている変数を知ることにはきょうみがなく、自然の中でどうしてこういことが起こっているのかを知りたいのだ。

（4）でも、だからといって自然をかえていけるとは思わない。そんなふうに考えたこともない。

いったい何が原因なのか、ということを知りたいだけだ。

一九六四年の夏、フランスのブルターニュで、恩師、パリ大学のボードワン先生に連れられ、海の底に棲(す)むエポフィルスという昆虫(こんちゅう)を見に行ったときのことを、よく覚えている。

しおが引くのを追いかけて、沖(おき)に二、三キロ歩いただろうか。⑥マンチョウになれば二十メートルの深さに沈(しず)む岩場の割れ目に、エポフィルスはいた。

命がけで見に行った。時間を計って、しおがみちてきたら急いで戻(もど)った。

海が戻る水の流れは川のような速さだった。そんな危険を冒(おか)すのは、あるいみばからしいことかもしれない。だが、つくづくいきものというのは大したことをやっていると実感した。へ 5

そういう虫がいて、人間が知らないうちに、ちゃんと動いている。海の底の⑦ユウキ物をエサにしている。そればかり食っているやつも、関係ないやつもいる。朝食うやつもいる。夜食うやつもいる。でも朝食うなら、その時間に海が引かなければ人間には見ることができない。そんなふうには、この海にはほかにも、ぼくらの想像もつかないへんな生き物がたくさんいるのだろう。そう思った。

へ 6 へ また、ぼくは昔からガという虫が好きだ。そもそも、なぜ昼間飛ばないで夜飛ぶのだろうというところにきょうみがある。昼間飛んだらいいじゃないか。暗いと敵がいなくて安全だというが、夜に出てきてエサを探す敵もいる。暗ければ安全とは決していえないだろう。

じつさいに、昼間飛ぶガもいる。それは夜飛ぶガの苦勞はしていないはずだ。それでも夜飛ぶなら、昼間飛ぶよりどこがいいのだろう、などと考えているとますますなぜ夜飛ぶのか、わからなくなってくる。

(4) それぞれに、それぞれの生き方があるのだ、といういいかげんな答えしか残らない。それなりに苦勞しているんだ、としかいいようがない。

(C) 、それなりに、どういう苦勞をしているのだろうということを、いろいろ考えてみるのがおもしろい。それは哲学(てつがく)的な思考実験に似ている。

エポフィルスにせよ、ガにせよ、(5) 苦勞するには苦勞するだけの原因があり、仕組みがある。それは何かということを探るのだ。

へ 7 へ たとえば*節足動物はなぜ節足動物になってしまったか、ということから考える。たまたま祖先がそうだったから、かれらは体節を連ねる外骨格の動物になっていった。

すると体の構造上、頭の中を食道が通り抜(ぬ)けることになり、脳を発達させると食道にしわ寄せがいくようになった。ではどうしたらいいか。

樹液や体液、血液といった液状のエサを摂(と)ることにした。それが、その形で何とか生き延びる方法だった。節足動物といういきものは、そういう苦勞をしている。

動物学では、現在の動物の形が必ずしも最善とは考えない。

そうならざるをえない原因があり、その形で何とか生きているのだと考える。

なぜそういう恰好(かつこう) (かつこう) をして生きているのか、その結果、どういう生き方をしているのか。そういった根本の問題を追究(ついきゆう)するのが動物学という学問なのだと思う。

いろいろないきものを見ていくと、こんな生き方もできるんだなあ、そのためにはこういう仕組みがあって、こういう苦勞があるのか、なるほど、それでやっと生きていられるのか、ということが、それぞれにわかる。

へ 8 へ その形でしか生きていけない理由を、たくさん知れば知るほど感心する。

そのかんげきは、原始的といわれるクラゲのような*腔腸(こうちよう)動物でも、高等といわれるほ乳類でもまったく同じだ。

このごろ、よく、生物多様性はなぜ大事なのかと聞かれる。ぼくは、簡単に説明するときにはこんなふうにいる。

生態系の豊かさが失われると人間の食べものもなくなります。食べものも、もとは全部いきもので、人間がそれを一から作れるわけではないのですから、いろんなものがいなければいけないのです、と。

ただそれは少し説明を省略したい方で、ほんとうは、あらゆるいきものにはそれぞれに生きる理由があるからだと思っている。

理由がわかって何の役に立つ、といわれれば、何の役にも立ちませんよ、というほかない。しかし役に立てるためだったら、こんな恰好(かつこう)をしていないほうがいいというものがたくさんある。へ 9

人間も、今こういう恰好(かつこう)をしているが、それが優(すぐ)れた形かどうかはわからない。これでも生きていけるといふ説明はつくけれども。

だからこそ動物学では、海の底のいきものも人間も、どちらが進化していてどちらが上、という発想をしない。

いろんないきものの生き方をたくさん勉強すると思う。ほくはそれでとてもおもしろかったし、そうすることで、不思議に広く深く、静かなものの見方ができるようになるだろう。へ 10 へ

いきものは全部、いろいろあるんだな、あっていいんだな、ということになる。つまりそれが、(6)生物多様性ということなのだと思う。

日高敏隆(ひだかとしたか)の文章による

*アクアリウム 水生動物を飼育する水そう。

*節足動物 昆虫・クモ・エビなどをふくむ、動物の種類の一つ。

*腔腸動物 サンゴやクラゲなどをふくむ、動物の種類の一つ。

問一 ぼう線①から⑦のカタカナの部分の漢字に直しなさい。

問二 次の一文をおぎなうとすると、文章中のへ 1 へからへ 10 へのどこが最もよいですか。おぎなう場所を一つ選び、その番号を書きなさい。

わかつてみるとかんげきする。

問三 (A) から (C) には、共通することばかり入ります。最も適当なものを次の中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア そして イ すなわち ウ しかし エ さて オ また

問四 波線(1)「話の順番が違う」と筆者が述べる理由として、最も適当なものを次の中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 学問とは本来、大きな疑問から手をつけるものだから。

イ 環境を知ろうという研究は生態を知る上で有効だから。

ウ 小さな日常の感覚を調べることがまず大事だから。

エ 部分が分かってても、全体が分かったことにはならないから。

問五 波線(2)のようになれるのは、「地球温暖化」がどのようなものだからですか。簡潔に説明しなさい。

問六 波線(3)について、どのような「認識」なのか、書きなさい。

問七 波線(4)の具体例としてあげられている動物はどれですか。次の中からすべて選び、その記号を答えなさい。

ア 人間 イ エボフィルス ウ クモ エ 金魚

オ ガ カ クラゲ キ サンゴ ク 猫

問八 波線(5)について、筆者が説明している動物の、「原因」「仕組み」をそれぞれ答えなさい。

問九 波線(6)が大事な理由を文章中から二十五字で探し、はじめとおわりの五字を書きなさい。

問九	問八	問七	問六	問五	問二	問一
はじめ	仕組み	原因				⑤
						①
					問三	⑥
おわり						②
					問四	⑦
						③
						④

受験番号
